

## 土方巽・暗黒舞踏の受容と変容（3）身体，言語，イメージ 野口体操と三木形態学を手掛かりに

三 上 賀 代  
MIKAMI Kayo

### はじめに 身体の新たなりアリティに向けて

舞踏家，舞踏グループがその訓練と創作に多くを負っている野口体操創始者・野口三千三（1914-1998）と，暗黒舞踏創始者・土方巽（1928-1986）に直接の面識はない<sup>1)</sup>。また東京芸術大学で野口と同僚であった解剖学者・三木成夫（1925-1987）と土方の接点もない。

土方の弟子（1978-1981 師事）としての筆者の土方研究と舞踏創作，指導および大学での教育は，もう1人の師である野口三千三（1982-1998 師事）の理念と実践に基く。さらに，筆者は野口を通して三木の思考に触れ，野口体操と同じく三木形態学に多くを支えられてきた。

「森羅万象あらゆるものにメタモルフォーズする肉体の可能性の発見による人間概念の拡張」という土方暗黒舞踏の根本理念は，野口の「体操による人間変革」，三木の「おもかげとしての生命記憶の意味（こころ）」の探求に重なる。前衛舞踊家，体操教師，解剖学者として彼らは探求の方法と方向性を明示し得たことにおいて他に傑出する。そして，彼らの試みは，結果として，近代の，合理，客観，人間中心主義を問うものとなった。

敗戦の焼土の上に自覚化された野口体操，戦後の急速な欧米化の中で日本人の，そして個の肉体を提起した暗黒舞踏，科学者の立場から主観の論証とも言うべき思考を行なった三木，三者はともに，自らの感覚や想い，つまり，自らのからだを根拠に，からだに向きあうことで，「私とは何か」「人間とは何か」を問い，その可能性の道と方法を拓いた。

情報化，国際化，先端医療等の進行進歩の中で，私，民族，人間，生命の境界はあいまいになり，私のからはますます薄く，遠くなっている。「情報の蚊に噛まれて薄くなってはいけない」という土方の言葉は，20年前に遺された私が私であることへの呼びかけである。

本論は，京都精華大学創造研究所助成研究プロジェクト（02-04）による「土方巽・暗黒舞踏の受容と変容」の実践及び研究の一環として，1997年三上博士論文以降の Butoh 研究の状況を踏まえ，野口体操と三木形態学を手がかりに，身体と言語とイメージの観点から，21世紀の身体の新たなりアリティを探るものである。

## I. 1997年以降の Butoh 研究の現状—土方暗黒舞踏技法を中心に

### 1. 舞踏譜公開と土方言語解読コード

「あなたの仕事は土方の言語を日本語に翻訳すること」と某美学者に言われて始まった1991年三上賀代修士論文<sup>2)</sup>が世界の土方研究の始まりとなる。この修士論文は1993年一般書『器としての身体—土方巽・暗黒舞踏技法へのアプローチ』として出版される<sup>3)</sup>。土方研究の遅れは、土方舞踏訓練の秘儀的性格と言葉による振付けノートである“舞踏譜”を含めた韜晦的土方言語への外部からの接近が困難なことに起因する。土方の弟子である三上の修士論文において土方“舞踏譜”が初めて公開され、“舞踏譜”他土方言語の分析による舞踏技法の解明を行なった三上論は、舞踊評論家・市川雅に「(舞踏技法は) 僕達には手の出ないところ」と評価され、ここにおいて土方言語解読のコードが作られた。

修士論文の継続研究としての三上博士論文の英訳<sup>4)</sup>を開始した2002年秋、三上論の主要論考の一部を読んだ監修予定者のアメリカの舞踏研究者から、2000年春、世界で初めての自ら英訳した土方言語を添付資料としてアメリカで公表された論文<sup>5)</sup>と三上論が「セイム アイデア」であるとの指摘を受けた。

世界で2人だけの土方研究における博士号保持者、栗原奈名子氏と筆者の論<sup>6)</sup>の「セイム アイデア」の指摘は、三上の土方日本語訳の解読コードによって栗原氏が土方言語を英訳し、論を立て得たことを示す。弁護士を通して栗原氏に質問状を出した後、2003年6月三上は、「セイム アイデア」の論拠、および国内で舞踏研究者を名乗らず国外でのみ研究発表をする栗原氏の学者としてのアンフェアな態度と、研究史を持たない舞踊研究全般の問題点を指摘し、栗原氏の『舞踊学』での反論を待った後、研究方法と主要論考の酷似に関する引用参照の不適切と不明記によって侵害された三上の土方研究におけるオリジナリティとパイオニア性の保証を舞踊学会に求める発表を行なった<sup>7)</sup>。

この事実は、土方研究において少なくとも舞踏理論と技法に関しては三上論以降新たな論が出ていないことを示す。2005年春土方研究3人目のアメリカでの博士論文<sup>8)</sup>も、土方言語の英訳という方法が研究の主要目的のひとつになっている。

三上博士論文以降1998年慶應義塾大学アート・センターに土方巽アーカイブが開設され、土方直筆の舞踏譜の公開と整理、さらに弟子たちによって舞踏譜の動きと土方作品再現の試みも始まっている。そして土方アーカイブと連動するように開催された国内外の舞踏シンポジウムや舞踏フェスティバルに至ってやっと、パリ逆輸入の Butoh から日本発の舞踏に変わった感が持たれる<sup>9)</sup>。また2000年には土方の弟子・和栗由紀夫によって記録された舞踏譜の分類整理がCD-ROM『舞踏花伝』として発売され、フランスやアメリカでの Butoh 関係書の出版、河村悟

による初めての土方著『病める舞姫』論の出版等，土方とButohを巡る状況は活況を呈する感がある<sup>10)</sup>。

しかし，海外の方が舞踏研究は進んでいると公言する舞踊研究者の言葉は，相変わらず舞踏の何が明らかになっているかの理解がなされていない現状を示している。

## 2. 超越の契機としての胎生学的錬金術 河村『病める舞姫』論と笠井『未来の舞踊』から

「舞踏とは命掛けで突っ立った死体である」という有名なテーゼは，土方が，物としての肉体と人間の思いの乖離，すなわち引き裂かれる心身の極点を舞踏の肉体に求めたことを示している。それは，物としての人形振りと人間を超えた神がかりを両極とする舞踊において，舞踊家の身体意識の問題として現象する。

錬金術的思考と工程のアナロジーから土方巽著『病める舞姫』を解読する河村悟『肉体のアパリシオン かたちになりきれぬものの出現と消滅 土方巽「病める舞姫」論』と，シュタイナーの神秘学的見地から舞踊史の中に土方舞踏を位置付ける笠井勲『未来の舞踊』はともに，土方舞踏に，素材と作品と制作者つまり主体と客体を同一肉体が生きる舞踊にとっての生の「超越」の技術つまり舞踊家の意識のあり様を探る試みである。

土方の舞踏作品同様，解読不能あるいは解釈を拒否し，自らの少年期を描きながら「回想」ではなく「想起」する「舞踏する文体」と評される『病める舞姫』の14章を追って，河村は，土方の「胎生学的錬金術」を読み解く。河村によれば，土方の錬金術的「肉体のメタモルフォーシスの技術」とは，中有的 さなぎ 体験を経ながら，「死の精製と分離」によって抽出した ものの隙 を秘薬としての不滅なる量子的な 精妙体 の探求であり，それは肉体の 向物性 と 向神性 の留め金をはずすことである，という。

笠井は，靈魂体人性三分説の古代神殿舞踊から魂体二分のバレエを経て一元論とオブジェ化の現代舞踊までと舞踊史を概観し，土方は，個の感情という「魂の道具」となった表現主義舞踊の身体と，オブジェ化の楽観主義を否定し，「物自体」という仮説に賭け，「物自体」から浮かぶフォルム，つまり「コードなき死者のフォルム」という「形象思考」によって舞踊を「思考する運動」にまで高めたとする。そして客体性を保証するために土方の意思において選択された「理念としての無垢」は，その後に来る法則性への永遠の反逆である「原初の瞬間」への絶対的帰依の精神であり，それは胎内の時空間へ拡大し，重力方向への超越を示すと論じる。

埴谷雄高がその初期に「胎内瞑想」と名付けた土方舞踏において，身体の運動となっていた舞踊が「生の飛躍の技術」としての芸術に転換し得たことの指摘が，河村と笠井の舞踏の錬金術論である<sup>11)</sup>。両論に示された主客未分を生きる胎児的時空間を，一元論としてではなく「命掛けの死体」を意思したという土方舞踏の具体的方法が三上論に示されることが理解される。

### 3. イメージと身体の構造機能 舞踏譜とワークショップから

#### (1) 舞踏譜の内容としての生成する森羅万象 和栗と小林舞踏譜

和栗由起夫が土方に師事した1970年から77年は、連打される舞踏公演の中で土方舞踏技法が完成されていった時期である。当時の全作品に出演した和栗が記録した詳細な稽古ノートを分類整理したCD-ROM『舞踏花伝』は、「マグマ」のような「ことばとイメージの森」である土方舞踏世界を、「深淵、神経病棟、解剖図鑑、焼け落ちた橋、壁、花、鳥とけだもの」の7つに分類、さらに意味に応じて、フォルム、動き、身体のかかわり方を88の舞踏譜に整理し、一部映像資料付きの動きを呈示する。

1969年から1974年土方のアスベスト館に在籍した小林嵯峨もまた自ら記録した“舞踏譜”から、「胎児」を中心に「光玉、高い鳥、陽炎態、貴婦人、少女態、植物態、闇・カオス、トカゲ・ミミズ、べっこう飴、幽霊態、老婆態、動物態」という分類図を作成する。

和栗の、上下に軽い「粒子」化の方向と「ぬれて重い不定形」化の方向、左右に「神経の分岐からの空間化」と「ぼやけて粒子化」の方向、さらに左右の「フォルム」と「材質」の方向、および小林の、胎児を中心に上下に「光玉とカオス」左右に「貴婦人と幽霊態」の配置は、三上『器としての身体』資料編の、圧力と熱によって「固体、液体、気体」と状態変化する地球物質のあり様としての分類、三上博士論文の身体の空間化の指摘と重なる。

世阿弥は神、鬼、天女を含む身体のあり様を九体から三体へと、その変身の内容を集約していくが、土方は、マグマや胎児の世界から森羅万象の生成変化の状態を「変化ではなく変貌」として分類する。

#### (2) からだに向き合う態度 舞踏家たちのワークショップ

舞踏家のワークショップには各舞踏家の舞踏観に基く目指すべき身体と舞踏の方法が示される。以下、土方舞踏草創期から各時代を追って、舞踏家の土方受容を見る<sup>12)</sup>。

1960年代前半土方と舞台を共にする大野慶人は、「月ぐらい取ってこなければ」とイメージに肉薄する思いを重視する。「私のポートレート」、「時間芸術としての日本文化と“しぼる”という動作」、「和紙と遊ぶ」、「背中意識」という日本画等を示しながらの稽古の展開の中に、個人のなまの感情や情念を否定した土方に対して、イメージへの惑溺とも見える大野一雄の思いのあり様と、さらにその思いを検証する枷とした「六尺は六尺」という肉体の構造と機能の側からの舞踏への接近方法がうかがえる。

1960年代後半から'70年代中盤の土方の弟子であり'70年代中盤以降サンフランシスコに在住する玉野黄市は、アメリカ先住民の「祈りのダンス」の身体技法とグラハムテクニクの「呼吸」によるコントラクションとリリースを取り入れながら、風や匂いに「動かされる」、何万

年の時間、中腰といった土方舞踏の特徴を、イメージ言語で誘導する方法を継承している。

1970年代前半土方に師事した和栗は、四肢の関節がすべて屈曲し糸で吊られるイメージで運ばれる「マヤ」というきついフォルムを運ぶことで集中力と基礎体力強化を行う。その後「ベーコンの顔」「花」「けだもの」などの舞踏譜をつないで各自の創作へと続く。

1970年代以降土方メソッド完成を促すことになった土方一番弟子・芦川羊子のワークショップは1988年と1991年の記録を資料として三上『器としての身体』に詳しい。

1990年代初頭舞踏第三世代の工藤丈輝は「二足歩行を疑う」をテーマとして、「胎児」から「尺取虫」「獣」「立つ」まで、身体のあらゆる場所が足場となる可能性を探る野口体操そのものと言えるワークを通して、「手足の出てくる必然性」に注意を促し、中腰の体勢による肉体のベース作りを意識化させる。工藤の「肉体の上にイメージ」という言葉は、土方の「技術のないイメージは危うい、イメージのない技術はくらい」に示される肉体を無視したイメージと思いだけでは「必然性の現出」としての肉体の変貌が現われてこないことを踏襲している。

山海塾に在籍した工藤同様、大駱駝艦系の舞踏家や田中泯らが野口体操を舞踏の訓練にうたっている<sup>13)</sup>のは、土方の舞踏技法成立以前あるいは直接土方の指導を受けていない舞踏家たちにとって、野口体操の「からだに貞く」というからだへの向き合い方と方法が、「からだを表現の道具にしない」という土方舞踏の身体観および舞踊観を支えることになるからである。

## II. 身体へのアプローチの方法、手段としての言語とイメージ

### —野口体操との比較から<sup>14)</sup>

#### 1. 身体生成現場の実況放送としての言葉—原初音韻論遊びとカタリ

舞踏譜を含む土方言語および「言語の貧困は感覚の貧困」として自らの身体感覚に基くことばの検証をも体操の営みとした野口の言葉は、自らの身体感覚の言語化によって創作の秘密を記した秘伝としての世阿弥の伝書に比することができる。「からだのことはやってみなければわからない」というのが土方と野口両者の基本姿勢である。

三上『器としての身体』資料編に分類してあるように、独特の身体感覚に基く土方言語においてオノマトベといった「前言語」的言葉の多出と重要性は野口においても同様であり、土方の「灰柱」「風だるま」「けつ頭」、野口の「原初生命体」「寝による」「ぶら上げ」「そへ（へその裏側）」「無脳の人」などの造語と、稽古場でノートをとることの指示は、両者が刻々の変貌を遂げる身体生成現場の実況放送としての言語を重視したからである。

「ことばと文章の二重のメタファーを両方とも無化」「主客入り乱れ文目分からず」と評される『病める舞姫』が押入れの中で弟子によって口述筆記されたという証言<sup>15)</sup>は、変貌する身

体感覚のスピードに筆の速度が間に合わないことを示している。また、稽古場での落語家のようにどンドンと主語述語が変貌する言葉によって、弟子たちの身体を変容させていく土方発話の特徴には、写真集『鎌鼬』の被写体となった少女の後日談にうかがえる「騙り」を指摘できる<sup>16)</sup>。

こうした特徴は、土方の言う「踊っている舞台を実況放送するような踊り」の観を示し、そこには「酔いと覚醒」の間を生きる舞踏の身体の刻々の変貌への舞踏家自身のまなざしがある。分節言語ではない肉体言語とも呼べる土方の発話は、土方同様に口述筆記と講義録を基に創作と論述を行なったと言われる折口信夫の論じる「カタリ<sup>17)</sup>」の様相を呈しながら、「錯乱という名の創造」を意思した土方は捏造された錯乱の中に、身体の生成現場を仮設する。禅の公案のような二律背反的言説の特徴もまた、アイデンティティと意識による身体コントロールをゆるがすためのものである。

そして、「神の光を臨終している」という辞世の言葉が、土方の指示の下、娘によって記録されたことにも見られる土方の姿勢と方法は、言語的思考を含む自らのからだを実験室として、人間の可能性を探る野口の姿勢に重なる。

野口の、「今はまだことばにならない感覚」の言語化という感覚の対象化と客観化は、「主観でない客観は存在しない」「錯覚でない感覚は存在しない」「誤解でない理解は存在しない」という感覚と言語の乖離やズレの認識の上に、あくまでも丁寧に、たいせつに「からだに貞く」姿勢と方法によって、実感に基づく感覚の差異の言語化の試みである。それは「独白、内言」すなわち「からだの中身の変化、“内動”」が心・からだ・ことば・声の本質であるとして、日本語を、自らの身体感覚を通して、和語と漢字の発生現場にまで遡る試みに至る。音声言語としての和語と、漢字の字源を甲骨文にまで遡ることは、世界認識の方法としてのことばの誕生をからだの感覚における思考の原点として、思考そのものを洗いなおすことにつながる。さらに、50音の一音づつを実際に発することによる身体感覚からことばの意味を検証しなおす「原初音韻論遊び」は、「一度バラバラに解体して新たな組み合わせによる可能性を探る」という野口の身体観と方法同様に、ことばの再生と可能性を探るものである。

身体感覚の言語化という対象化、客観化つまり対象としての肉体を生きる主体としての身体における二元論止揚の試みを、土方は「錯乱という名の創造」の捏造の意思において、野口は「からだに貞く」「おもさに貞く」という姿勢と方法に拠った。

この両者の方法は、「イメージ体操」と呼ばれる野口体操が「イメージと呼んでいるものこそ意識の実体...イメージによるしか動きようがないのが人間」という仮説の下に、「イメージによる思考」「肉体による思考」を目指すのと同じく、土方は舞踏によって肉体の思考、野生の思考を目指す。土方の「けつ頭」野口の「無能の人」という造語に示されるのは、理性、客観、頭脳優位への問いであり、人間の肉体の可能性への示唆である。

## 2. 言語イメージによる身体内部感覚としての時空間と力性

ラバンの分析した舞踊の動きの構成要素である時間、空間、重さ・流れ<sup>18)</sup>は、動きの運動性とともには舞踊家の持つイメージによって、その質と量が決定される。以下、土方と野口のキーワードの比較から、時間、空間、力性の観点を踏まえ、両者の身体観、運動観、人間観、世界観の特徴を考察する。

### (1)「水の入った皮袋」と「灰柱」 重さと時間感覚による崩れのダイナミズム

「空間恐怖症」という土方の言葉は、身体の運動によって外部空間の構成をはかるモダンダンスの志向性を指す。舞踊は「空間の創造」である。が、認識的である外部空間に対して、感覚的に把握される時間と身体内部空間が、舞踏の身体と動きを決定する。野口の「水の入った皮袋」と土方の「灰柱」という身体イメージは、身体内部感覚の時空間の感知による動きの質の変容を喚起する。

力の抜けたからだ液体状に揺れることから発想された、出入り自由な皮膚に包まれた「水の入った皮袋」という野口の身体観は、筋肉の収縮力に頼り、重力つまり自然に抗することを力としてきた運動観に対して、「自然直伝」「重さが主たるエネルギー」という運動観とその方法を示す。野口は、バランスとアンバランスの中に成立する動きにおいて筋肉の働きを、身体内部の重さのバランスを崩し微調整をする感覚器と捉え、身体感覚の中心に、触覚的なものから筋・腱・関節による体性の深部感覚や内臓感覚を置く。液体のイメージは、こうした内部感覚において重さの流れという、動きの本質としての内部からの動きを生むことにつながる。

一方、粒子にまで還元された肉体が極小のバランスでかたちを保ち立つイメージである土方の「灰柱」は、一瞬の風にバランスを崩し浮遊する。この浮遊する粒子のイメージは、身体の物質化と空間化を企図する土方舞踏の基本イメージとなる。死の二ヵ月前の最後のワークショップの最終日の最後に土方が呈示した「あじさいの原、膿の海、とうもろこしの枯野、たんぼぼ密生の野原」に、にじみ、かすみ、すすけるという空間の質感の変容は、身体を粒子にまで還元し、その密度によって変わる空間イメージである。こうした肉体の物質化のイメージへの「自己放棄」が土方「虫の歩行」に示された「意思即物質」の内容である。

静止しているかに見える独楽の回転は、換言すればバランスが崩れ続けていると言える。「水袋」は重力方向に崩れ続けることで刻々の一点を流れとして現出し、一瞬のバランスの崩れの後浮遊する「灰柱」は重力ゼロの地点を崩れ続けていると捉えられる。

立つことから始まる世界の舞踊に対して「立つのではなく崩れる」という土方の指摘は、野口の「水袋」を端的な例として、身体内部感覚としての重さと時間を中心にした「崩れのダイナミズム」のプロセスを想起させる。

## (2)「内触覚・外触覚」と「体性深部感覚」、「風だるま」と「非意識主体説」

### 皮膚境界と空間

皮膚に境界づけられることによって私の肉体は私となる。

土方が最終提起した無限に引き裂かれる「内触覚」と「外触覚」の身体知覚は、皮膚境界の希薄化による身体の空間化と、それにとまなう身体の状態と身体意識の変容の企図と考えられた。

このイメージと方法は、空間に開かれた出入り自由な皮膚を脳・神経の原初形態である総合的感覚受容器とし、内触覚とも言うべき「体性深部感覚」や内臓感覚を身体知覚の基礎に置く野口の方法論の延長にある。

「舞いを舞い、舞に舞われ」ながらも、空間の中に自らの身体を見通す舞踊家の身体意識を指す世阿弥の「離見の見」に、土方と野口は身体内部感覚の重視を加える。能の身体もまた、多方向への「引ッパリ合イ」状態を身体内部に組織的に作り出して立つ<sup>19)</sup>。こうした身体を、野口は「界面がはっきりしていない」、土方は「内が外で外が内」という言葉によって身体境界の意識化、希薄化による身体の空間化として捉える。

そして、自己の境界が希薄あるいは溶けるイメージによって変容する身体意識は、土方の「風だるま」と野口の「非意識主体説」によっても指摘される。

『日本霊異記』の中から焼かれるわが身を見つめる僧の話をはきつつ、吹雪に身を焼き焼き戸口に立つ土方の「風だるま」の話は、吹雪に巻かれ凍え、さらに戸口で溶けて境界がないという身体の状態を示し、「いいもの見たな」と主語が示されないまま終わるこの行程は、舞踏家の身体の状態とそれを見通すまなざしについて語っている。『日本霊異記』通りこの話は、臨死体験といった意識レベルの落ちた、あるいはゼロの状態と言うこともできよう。

こうした意識状態は、野口の意識は非意識の一部という「非意識主体説」の非意識のあり方であり、土方は「身を焼き焼き」風に巻かれるわが身を見つめることをもって、舞踏と呼んだ。つまり舞踏においては、身を焼く、あるいは「内触覚と外触覚」の無限の引き裂かれ、さらには身体を見つめるまなざしという身体意識の無限の増殖による、「無化」の果ての「無尽蔵」な世界の現出が図られる。

### 3. 刻々の変貌としてのメタモルフォーズ いのちの根源へ

#### (1)「原初生命体」と「衰弱体」 主客未分の意識

主客未分の、「無化」の果ての「無尽蔵」な世界は、野口の「原初生命体」、土方の「衰弱体」という対称的な言葉で示される。

「原初生命体」は、ロシアの生物学者・オパーリンの『生命の起源』の「液滴説」で想定されたコアセルベートのように、流体的軟体にも宇宙の星雲にも似て、生死の境界、内外の境界



つまり自他の境界が明確でない未分化な全体としてのからだという、野口の実感的身体観である。それはまた、精子と卵子が合体した瞬間に悠久の宇宙のダンスとも見える回転を始める受精卵にも例えることができる。野口は、一日の仕事の後の湯船に溶け出すからだところから「ほぐれ、ほどけ」ている時に実感できる心身の状態を、「空」や「無」の実体ではないかと言い、そうしたからだ、こころ、意識のあり様が生きものの基本であるべきことを「原初生命体」によって提唱する。

この「原初生命体」的あり方は、「解放の原理」によって説明される。後肢に乗ることによってぶら下がり解放された前肢が腕と手になることで道具を使い文化を生み人間になったことから、可能性の前提は休み解放されていることという野口の「解放の原理」は、筋肉のみならず、意識が休んでいる非意識の状態を、生きている人間のベースに置くものである。

未分化なひとつの全体としての「原初生命体」的あり方と、運命と重力の全受容としての土方の「衰弱体」は、「風だるま」「非意識主体説」をも包含した主客未分の身体意識状態を示す。「原初生命体」と、それとは対称的な病み衰え消えていくイメージの「衰弱体」は、ともに刻々の変貌を遂げる身体の状態と身体意識を指す。こうした身体が土方の探求した「メタモルフォーズする」であり、それは、野口理念における重力下の今ここに在る絶対的かたちとして、刻々の時間の断面をうつすものであると考えられる。

## (2) 胎児と蛆虫から 動きのモデルと肉体の記憶

土方舞踏の、メタモルフォーズする、つまり「なる身体」の内容となった霧や風から岩石、植物、動物に至る自然物や森羅万象は、「自然直伝」をうたう野口体操における動きのモデルであり、感覚を磨くための教材となった。野口体操教室に持ち込まれた甲骨文から、化石や鉱物、蕨や薔薇、和紙、独楽などの様々なおもちゃに触れ、抱く実感を通して、自分のからだの裡の変化を味わい、感覚の差異の言語化を試みることもまた野口体操の営みであった。

こうした野口体操の営みと岩石鉱物を地球型生命体としての人間の祖先という野口の発想は、死者を舞踏教師として、先祖代々の思いと「からだに沁み込んだもの」の記憶を探り、さらには石の時空間、樹木の時空間の身体感覚を踊る土方舞踏の肉体記憶のスケールに重なる。

土方舞踏譜に見られるカオスやマグマからの生成現象は、土方が石や樹木の時空間さらには種子や胎児といったいのちの発動の様相の変貌を舞踏の現出として求めたことを示す。それは、葦の芽が泥沼の中から萌え出る力に、「ウマシアシカピヒコヂノ神」の現出を見た古代人の感覚につながり、さらに日本文化の原理のひとつを半透明と考え、胎児を半透明の蛆虫と見る野口の文化観と生命観に重なる。初期作品に種子や胎児を提示し、光と闇のあいまいに日本文化を探る土方と、生命のちからの根源の原初モデルに蛆虫と胎児を置く野口は、発動するいのちの

-144- 土方巽・暗黒舞踏の受容と変容(3) 身体、言語、イメージ—野口体操と三木形態学を手掛かりにあり様を自らの肉体、からだに探求する。

### Ⅲ. 原型とメタモルフォーズ—三木形態学を手がかりに

#### 1. 38億年の生命記憶—大学「暗黒舞踏」ゼミでのパフォーマンス

岩石動物を地球型生命体の祖先とする野口の発想は、三木成夫の形態学的生命記憶の論に裏付けられる。

三木は、ゲーテの植物学、クラークスの生命学の影響を受けながら、解剖学、発生学、比較古生学の見地から、ヘッケルの「固体発生は宗族発生を繰り返す」という進化論を文化的知見にまで展開する。それは、36週目の胎児に古代魚類であった記憶(おもかげ)を見る三木のまなざしに基く。

海中の液滴から発生分化する生物の系統樹の中で、「食と性」の行動において光合成を持たない動物が移動の必要性から「感覚・運動器」を生み、植物と動物が別れていったとする三木は、内臓を植物性器官、体壁を動物性器官として、人類分化の過程は、動物性器官の植物性器官への介入の過程であるという。

三木の発想は、野口の随意筋を主とした体壁系の運動観を問い内臓感覚と体性深部感覚を主とした動きの探求、および土方のからだを表現の道具にしないという舞踏観に根拠を与える。

動物性器官である筋肉と感覚の緊張を「ほぐし」、植物性器官である内臓と深部感覚を注視する野口体操は、生命記憶の古層の浮上を可能にする。筆者主宰のとりふね舞踏舎が、舞踏のベースとして強度ゼロのからだを求め、野口体操による「ほぐし」を行うのは、以上の理由による。

世界でたったひとつの大学の「暗黒舞踏」ゼミでも、半年間は野口理論に基づくマッサージと体操の「ほぐし」を行う。舞踏家は勿論、表現者になりたいという学生もほとんどいないゼミでの「ほぐし」の授業は、「からだに向き合い、からだに出会う」時間である。

毎年約25人のゼミ生が半年間の「ほぐし」の授業の後、たった一度だけの白塗り「体験舞踏」として、「38億年の記憶」という野外パフォーマンスを行なう。説明も指示もなく他者に見せる意図もなく、一個の受精卵から魚類、両生類、爬虫類を経て人間として立つまでの記憶を遡るパフォーマンスは、外部にひらかれた感覚と内部に向かう感覚を基に、自分のからだに向き合う3時間となる。

パフォーマンスを続けた5年は私にとって驚きの連続であった。マッサージと体操の「ほぐし」の授業で、「気持ちいい感覚は自然の神様のご褒美」という野口の発想に基いての、人に委ね、重さに委ねる気持ちよさを味わい、「重さがエネルギー」という感覚も分かり始める。

そして、表現者を望まない学生にとっての白塗り体験は、死を内包した自分のからだに向き合うイニシエーションの経験ともなる。

強度ゼロと言えるほぐれた肉体が、目的性を排除されて立ち歩くという動きは、日常の次元を超えた様相を示す。野外に出るまで20メートルの廊下の移動に1時間かかる学生、空を瞳に映し池の端に転がったままの2時間が一瞬であったと言う学生、立ち上がるとしては崩れ続ける学生、上げようとする片足の重さに耐え切れず最初の一步が踏み出せない学生、自分の手を不思議そうに見つめる学生、終了の合図の鐘の音の「チーン」もまた遠いからだの遠い音として聞こえるようだ。教室へ帰る階段の下で泣き続けた学生は、「自分に向き合うことが一番こわい」と感想を書いてきた。「水の中にいた、水は質量の違う空気だと実感」等、変性意識状態ともいうべき意識やからだの状態に、「宇宙より遠い私の肉体」という土方の言葉が比喻ではなくそのまま私たちの生命記憶として、三木のいう「遠感覚」の中に現れる。

## 2. 眠る動物性器官 アイルランド・ベケットセンターで

太陽に向かい天地の間に伸びる植物の自然なあり方に対して、重力に抗して立つ人間の意志を反自然的と捉える三木は、動物性器官を鎮めることによる、瞑想的あるいは宇宙的感觉感得の可能性を示唆する。

「苦しめられてきたエゴから解放された」と泣いた中欧スロベニアの大学生<sup>20)</sup>の言葉には、西欧近代の閉塞感が今なお続いていることが示される。1950年代、演劇や舞踊の身体および東洋的知への希求は、論理的思考と自己確立を求められるヨーロッパ近代突破への手掛かりを探ったのであった。'04年2月国際交流基金助成の下共同制作に訪ずれたアイルランド、ダブリン、トリニティ・カレッジ、ベケット・センターでは、西欧の俳優とダンサーと学生たちが、土方舞踏の「表現しない表現」に苦戦した。何もおこらないモノログ中心の不条理劇の先駆者であるサミュエル・ベケットのセンターにおいても、俳優は自らの表現性に苦しんだ。彼ら西欧人の「何もしないことをする」意識とからだがうるさく感じられる<sup>21)</sup>。

日本人は何もしない時空間を美しい自然の中に体得している。世阿弥の「花」のメタファーは、世阿弥が時を得て自ずから咲き散る花のように自ずからなる表現を求めたことを示し、戦略として「わが心我にも隠す安心」がいかに獲得されるかをその芸道論とした。それは、素材と作品と制作者をひとつの肉体が生きる舞踊家の表現意図を自らにも隠すための土方の「表現しない表現」のメソッドに類似する。能という伝統芸能が「型に入って型を出す」というかたちで、型の中に自我を閉じ込める過程を経て無碍自在の境地に至ることを、土方は舞踏家の意識と肉体を「しばる」ことによって、心身のせめぎ合いの拮点としての現われを舞踏の表現とした。土方のカリスマにおいて可能であった「しばる」という方法とは対称的な野口の「ほぐ

す」という方法が、動物性器官の鎮まりによる汎自然的身体と意識のあり方を生み、自我の溶解を導くと考えられる<sup>22)</sup>。

そして、西洋の「肉の燃焼する」ようなエネルギーに対して、「蓬の燃えるような煙」としての日本人の肉体を対置する土方の身体観は、農耕民族としての日本人が植物性器官に基いて生きてきたことを示している。神楽等の民俗舞踊が、運動として捉えきれない理由も、筋肉・感覚という動物性器官ではなく、大地とのつながりにおいて捉えられる植物性器官の動き、蠢きに基くものであることに起因すると言える。

西洋人の中でも個の表現性を求める俳優やダンサーではなく、サーカスのシルク・ド・ソレイユの演者たち、あるいは韓国漢城大学舞踊学科のバレエ専攻ではない民俗舞踊専攻の学生たちには「何もしない、表現しない」身体性が現われる。それは、危険の中で原理に適った刻々の一点を探し続けるサーカス、および個の表現ではない宗教性につながる民俗舞踊の身体性に、舞踏のモノとしての静けさが現れることを示す<sup>23)</sup>。

モノの静けさは、鉛直方向の一点に立つ卵に象徴される。それは、舞踏家にとって、土方舞踏の中心に捉えられた「がに股」という中腰が、腰と膝がゆるみ「沈む」ことによって大地とつながり、次への可能性に拓かれた植物性の姿勢によって現れるモノとしての静けさである。

### 3. 何故だかわからないけれど涙がでる 観客とのコミュニケーション

「表現しない表現」のメソッドによる「晒される」肉体を意思した土方暗黒舞踏の表現意図というパラドックスは観客のまなざしの中に完結する。舞踏家の肉体という物質を通して観客の見るイメージあるいは想いは、三木の言う遠感覚と近感覚の中で時間と空間を自由に超えられる人間だけが持つ「客観視と想像力」に基くものである。

この人間の「客観視と想像力」に基く「想い」は、三木の言うように内臓性の鰓呼吸から体壁系の肺呼吸すなわち生命的呼吸から意思的呼吸への変換によって可能性とともに息詰まり現象が始まったのと同様に、人間だけが持つ幸と不幸を生む。が、「何故だかわからないけれど涙が出る」という海外舞踏公演評には、舞踏家と観客の、宇宙感覚にまでひろがる生命記憶のリズミ的脈動の体験的時間の交響が示される。

三木形態学に示される通り、空気が液体（血液）、固体（組織）に浸透する物質の循環に魂の循環を重ねるヒトの「想い」は、からだという枠組みさえ超えてしまう大気の流れ、こころの解放、意識のひろがり、時にはこの世とあの世を行き来するようなこころのゆれとして、舞踏家の肉体に結実する。この時、舞踏家と観客の間に成立するコミュニケーションは、個を超えた生命記憶の交響として、舞踏家と観客のからだ響きあう。

## まとめ 内蔵復興による胎児的世界の感得から私になる

時代の風は一瞬にして変わる。スキャンダラスな前衛であった舞踏にクラシックの形容が冠され、体育界の異端であった野口体操の提唱してきた「体ほぐし」が1998年に改訂された学習指導要領体育科の目玉として新たに加えられた。科学の世界では特殊な扱いであった三木理論もまた昨今吉本隆明らによって驚きをもって取り上げられている。そして、暗黒舞踏や野口体操の認知のみならずオカルト視されていた「気」さらには「靈魂」といった目に見えない世界が科学の検証を受けることにも違和感が少なくなっている。

本稿において、舞踏とは「はぐれてしまった自分の肉体に出会う」ことという土方の言葉が、制度化されはぐれてしまった肉体への気づきの意と同時に、地球生命体の祖先である岩石鉱物、そして生物系統樹で分かれていった植物や動物に出会う、ということを目指すと考えられた。故に、土方の意思したメタモルフォーズする肉体の可能性の探求は、野口の言う「おおもと」の私への、「私になる」道程であると理解できる。

三木の言うように、体壁をほぐすことによって随意筋による意思という人間の動物性が眠り、内なる植物が目覚め、植物という自然の時間、胎内瞑想的時間を生む。動物性器官を鎮めることによって、からだの中のこころという自己との対話が可能になる。大地に根を下ろした植物の生命体こそ、遠感覚によって生命活動が導かれる。ヒトのからだも植物性器官と対話することによって、遠感覚の可能性が見出される。この時土方の「宇宙より遠い私の肉体」もまた比喩ではなくなる。

大地に根を張り太陽に向う樹木の、根がバリバリと地中を這い、梢が大空へ拡散していくイメージは、土方死の直前、最後のワークショップまで続くイメージである。身体は大地とつながることによって宇宙との一体化がはかられ、ひとつの天体まさにマクロコスモスと化す。この地球とのつながりは野口のいう「重さ」によって感得される。

そして、未分化な全体としてのコアセルベートあるいは宇宙の星雲に例えられる野口の「原初生命体」的あり方は、仏教学者・玉城康四郎の体感した禅定の深まりと共に頭から順々に「消えて」いき最後はひとつの玉になるというあり方に重なる<sup>24)</sup>。私たちが宇宙の星雲のような受精卵のダンスを踊りながら生を受け、胎内瞑想的時間が禅定が深まるとまたひとつの玉になることによって語られる時、私たちの内なる自然、内なる宇宙が確かなリアリティを持つ。

土方の「肉体の埋没史」「からだに沁みたまもの」が晒される舞踏とは、正史の裏面の暗黒だけではなく、日々の行動がからだの生活史として刻まれ、体験した時間と空間が三木のいう「億の日記帳」に記されるものと同義であると理解された。

21世紀の舞踏のメタモルフォーズのリアリティが、三木の提唱のまま、日々の生活の中に大

・148・ 土方巽・暗黒舞踏の受容と変容(3)身体、言語、イメージ 野口体操と三木形態学を手掛かりに  
自然の声と力である「生命のちから」をすなおに受け止める植物性器官つまり内臓の復興によ  
って、古代人や幼児のゆたかな心情を取り戻し、新たなヒトの次元への大きな手がかりを示す  
ものと考えられる。



写真1 白塗りをするアイルランドの著名な映画俳優

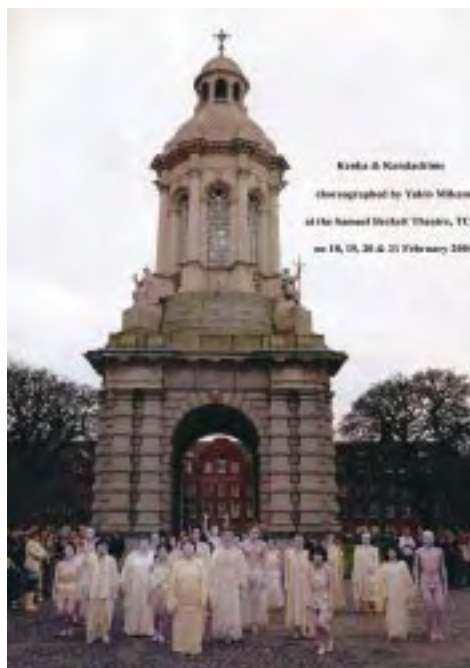


写真2 舞台公演前の野外パフォーマンス

写真1, 2ともに 撮影 坂内 太  
2004.2 アイルランド・ダブリン トリニティ・カレッジ, ベケットセンターにて

## 註

- 1) 土方と野口の接点として、日本へのドイツ表現主義舞踊導入の先駆者・江口隆哉、宮操子の舞踊研究所がある。同研究所に、野口は戦後間もなく舞踊研究のため通い、そこで大野一雄を兄弟子として舞踊の舞台に立つが、「自分の踊りは舞踊ではなく体操」の自覚を持つ。時期を前後して江口、宮舞踊研究所に出入りした土方はジャン・ジュネと大野一雄を師と呼ぶに至る。

もう一つの接点として、土方の支持者であった三島由紀夫が、ボディビルによって肉体改造を行っていた1950年代中盤、野口は第1回ミスター日本コンテストの審査委員長を務めたが、動きの美しさを伴わなければ本当の力強さにはならない、と筋肉のみを誇示するボディビルのあり方に疑問を呈している。(ともに野口体操教室での談話から)

- 2) 三上賀代「土方異研究 舞踏技法の考察」お茶の水女子大学修士論文 1991. 3

なお Butoh 一般の研究書としては Susan Blakely Klein, “Ankokoku Buto: The Premodern and Postmodern Influences on the Dance of Utter Darkness” Cornell University という修士論文の出版(1988)が既にあった。

- 3) 三上賀代『器としての身体 土方異・暗黒舞踏技法へのアプローチ』ANZ 堂 1993

- 4) アメリカでの出版を予定してサンフランシスコ州立大学演劇学部助教授 Jo Tomalin 他とのプロジェクトが進行中(2002-2004 京都精華大学創造研究所助成)

- 5) 栗原奈名子 “The Word of Tastumi Hijikata” The Drama Review 2001 spring New York

- 6) 栗原奈名子 “The Most Remote Thing in the Universe: Critical Analysis of Hijikata Tatsumi’s Butoh Dance” New York University 1996. 9

三上賀代「土方異研究 暗黒舞踏技法試論」お茶の水女子大学博士論文 1997. 3

なお舞踏一般の博士論文としては Joen Elizabeth Laage, “Embodying the Spirit: The Significance of the Body in the Japanese Contemporary Dance Movement of Butoh” Texas Woman’s University 1993

- 7) 三上賀代「土方異・暗黒舞踏の受容と変容(1)国際化社会における舞踏研究の現状と論文のオリジナリティの問題 栗原論文を事例として」(舞踊学会第3回定例研究会発表、於・早稲田大学、『舞踊学』第26号 2004 p.65, 2002-2004 京都精華大学創造研究所助成)

- 8) Bruce Baird, “Buto and the Burden of History: Hijikata Tatsumi and Nihonjin” University of Pennsylvania 2005

- 9) 1993年の韓国ソウルでの日本舞踏フェスティバルはヨーロッパの Butoh 評価を基に開催された感が強く、2005年に至ってやっと政府間の文化交流のフェスティバルとして日本発のプロジェクトとなったことが舞踏家・和栗由紀夫らによって指摘されている。2003年ブラジルでの舞踏フェスティバルをはじめ、イスラエル、シンガポールのフェスティバルへの舞踏家、舞踏グループの招聘等、欧米のみならずフィリピン、ロシア、南アフリカ他全世界に広がる舞踏の影響は、各国での舞踏公演やワーク

ショップおよび研究者や舞踊家の来日に示される。

なお本研究助成期間の、筆者の国際会議招待発表等としては

- ・“Deconstruction of the Human Body: fom a Viewpoint of Tatsumi Hijikata’s Ankoku Butoh” (国際人類学民族学会議 2002.9 於・東京)
  - ・アジアダンス会議での講演, ワークショップ (国際演劇協会・ITI/UNESCO 日本主宰 2003.2 於・東京)
  - ・シルク・ド・ソレイユ, サーカス「キダム」にてワークショップ 2003.4 於・代々木公演会場
  - ・「私の肉体への希求—土方巽 残る遺志」読売新聞 2003.4
  - ・ブラジル舞踏フェスティバルプログラム「肉体へのまなざし」2003.8
  - ・身体運動文化学会シンポジウム「美・身体・表現」パネリスト 2003.11 於・神戸女学院大学
  - ・韓国漢城大学舞踊学科での講演, ワークショップ 2004.6 於・ソウル
  - ・Symposium: The role and trend of the twenty first century dance world “Toward the era of soul :from viewpoint of Tatsumi’s Hijikata’s Ankoku Butoh” (韓国国際舞踊学会第19回国際学術シンポジウム大会号 pp.13-23 2004.12 於・ソウル)
- 10) 1997年以降の土方および舞踏関係出版書としては以下のものがある。
- ・大野一雄舞踏研究所編『大野一雄—稽古の言葉』フィルムアート社 1997
  - ・大野一雄他『大野一雄』書肆 青樹社 1997
  - ・『土方巽全集 I, II』河出書房新社 1998 (普及版 2005)
  - ・『芸術新潮—特集・世紀末に降臨する舞踏の“魔人” 土方巽』新潮社 1998.3
  - ・土方巽アーカイブ編『播磨大踏鑑 四季のための二十七晩』慶應義塾大学アート・センター 1998
  - ・和栗由紀夫 CD-ROM『舞踏花伝』ジャストシステム 1998
  - ・大野慶人／大野一雄舞踏研究所編『大野一雄—魂の糧』フィルムアート社 1999
  - ・Sondra Horton Fraleigh, “Dancing Into Darkness: Buth, Zen, and Japan” University of Pittsburgh Press Dance Books 2000
  - ・土方巽アーカイブ編『土方巽 [舞踏] 資料集 第一歩』慶應義塾大学アート・センター 2000
  - ・中村文昭『舞踏の水際』思潮社 2000
  - ・種村季弘『土方巽の方へ—肉体の六〇年代』河出書房新社 2001
  - ・大野慶人／大野一雄舞踏研究所協力 DVD『大野一雄—美と力』NHK ソフトウェア 2001
  - ・Odette Aslan et Beatrice Picon-Vallin, “BUTO (S)” CNRD Editions Paris 2002
  - ・河村悟『肉体のアパリシオン—かたちになりきれぬものの出現と消滅—土方巽「病める舞姫」論』クレリエール出版 2002
  - ・清水正『土方巽を読む—母性とカオスの暗黒舞踏』鳥影社 2002



- ・川崎市岡本太郎美術館，慶應義塾大学アート・センター編『土方巽の舞踏 肉体のシュルレアリスム 身体のアントロロジー』川崎市岡本太郎美術館 2003
- ・荒井美三雄企画，監督 DVD『土方巽・夏の嵐・燔犠大踏鑑 2003-1973』イメージフォーラム 2003
- ・中谷忠雄『土方巽の舞踏世界・中谷忠雄写真集』メディアプロダクション 2003
- ・原田広美『舞踏大全 暗黒と光の王国』現代書館 2004
- ・笠井叡『未来の舞踊』ダンスワーク舎 2004
- ・清水正『暗黒舞踏論』鳥影社 2005
- ・小林嵯峨『うめの砂草 舞踏の言葉』アトリエサード 2005
- ・山田せつ子『速度ノ花』五柳書院 2005

修士論文では

- ・韓国キョンソン大学 カン・ミヒ「土方巽の舞踏観に関する研究」1997
  - ・シンガポール国立大学 Lee Chee Keng, “Hijikata Tatsumi and Ankoku Butoh: A Body Perspective” 1998
  - ・アイルランド Hull 大学 Fergus Byrne, “Nerve Quarries -A Comparative Study of Helene Cixous and the Butoh of Tatsumi Hijikata” 2003
  - ・お茶の水女子大学 呉承娥「韓国創作チュムの発展に舞踏が与えた影響に関する一考察」2006
- 11) 大野一雄もまた胎内宇宙論を基底に踊る。(大野一雄『大野一雄』書肆 青樹社 1997)
- 12) 舞踏ワークショップは以下のものを筆者が記録。
- 玉野黄市(2003.7 於・中野テレブシール)
- とりふね舞踏舎夏合宿・大野慶人，工藤丈輝(2005.8 於・大磯とりふね舞踏舎 黒金閣)
- 和栗由紀夫(2005.7 於・京都芸術センター)
- 13) 前掲注10, Fergus Byrne, Odette Aslan et Beatrice Picon-Vallin, “BUTO (S)”, 前掲注 8 Bruce Baird の論の中で，田中泯や，大駱駝艦系の舞踏グループによって，欧米へ Butoh が，野口体操を基礎にしていることが紹介されている。大駱駝艦主宰の舞踏家・磨赤児は1960年代演劇界で活動する野口から直接指導を受け，舞踏訓練の方法として野口体操を明示している。
- なお，野口体操が1960年代の新劇界を牽引することになったのは，野口がその存在を知らないまま「スタニスラフスキーシステムに酷似」した感覚回路開発システムの創造を行なっていることが演出家・岡倉士郎によって指摘されたことに始まる。
- またスタニスラフスキーとの関係では，土方夫人・元藤燐子が，ニューヨークのアクターズスタジオで日本人初の指導員となったゼン・ヒラノとの若き日の交際を語っている。
- 14) 本章は「土方巽・暗黒舞踏の受容と変容(2) 身体，言語，イメージ 野口体操との比較を中心に」(第55回舞踊学会発表，於・沖縄芸術大学，『舞踊学』第27号 p.33, 02-04 京都精華大学創造研究所助成)を改訂補筆。

- 15) 『病める舞姫』が押し入れの中で弟子によって口述筆記されたという証言は、巖谷國士の講演の中で。
- 16) 土方の「騙り」的語りの特徴は、土方の発話を録音した『慈悲心鳥がバサバサと骨の羽を拡げてくる』、NHK放送「土方巽の原風景」の中のモデルの証言に指摘できる。また、芦川羊子を素材としての舞踏メソッドの創造を土方は「私も人がいいから相手に乗り移って…」と言い、筆者自身、稽古場で刻々に変貌する土方の語りによって身体変容が導かれることを体験している。
- 17) 折口信夫『死者の書』の語部のおうなに関して、語部のカタリの状態と意識について、語りの前提として 神掛かり の状態から ひとり語り が始まることが指摘されている。(西村亨編『折口信夫事典』大修館書店 1988 p.156)
- 18) ルドルフ・フォン・ラバン、神沢和夫訳『身体運動の習得』白水社 1985
- 19) 渡辺守章『劇場の思考』岩波書店 1984 p.22
- 20) 2002年2月国際交流基金助成によるスロベニア・リュブリアナ大学でのレクチャー、ワークショップ、舞踏公演(クオアチア他)には京都精華大学生5人、中・高年舞踏グループ・湘南舞踏派も同行参加。
- 21) 2004年2月国際交流基金、京都精華大学創造研究所助成によるアイルランド・ダブリン、トリニティ・カレッジ、ベケット・センターでのレクチャー、ワークショップには京都精華大生3人、湘南舞踏派の中・高年、染色家も同行、舞台美術、衣装も現地で共同制作、新聞評に、日アイルランド出演者の違いが指摘されている。
- 22) 野口体操の「しばる」、土方舞踏の「ほぐす」というコインの裏表のような方法によって、両者は「御し難い意識」の溶解を図る。(三上賀代「野口体操の社会的影響 舞踏グループを中心に」『体育の科学』第48巻第2号 杏林書院 1998.2 pp.134-138)
- 三上賀代「ほぐす、ふれる、であうから舞踏へ」久保健編『「からだ」を生きる 身体・感覚・動きをひらく5つの提案』(創文企画 2001 第1章)で野口体操から舞踏への具体的方法を論述。
- 23) 「日本生れの暗黒舞踏と野口体操 モノの存在感に向けて」(人体科学会第12回大会号 pp.55-56)
- 02-04 京都精華大学創造研究所助成期間中の以下の舞踏公演には京都精華大生が出演参加
- 2002年12月人体科学会シンポジウム招待舞踏公演(於・早稲田大学)
- 2003年2月アジアパフォーマンス祭招待舞踏公演「カミのしっぽ」(於・両国シアターX)
- 2003年9月とりふね舞踏舎公演「バッケ 花咲く乙女たち」大蔵流宗家大蔵仙太郎他、イタコ、韓国僧舞舞・李七女、バンブーオーケストラら異ジャンルとのコラボレーション(神奈川県共催、於・かながわドームシアター)
- 2003年10月同上(於・京都大学西部講堂)
- 2004年10月とりふね舞踏舎公演「燦・月譚」(神奈川県主宰、於・かながわドームシアター)
- 2004年10月同上(於・京都大学西部講堂)ゲスト・大野慶人
- 24) 玉城康四郎『脳幹と解脱 形なきいのちが通徹する』哲学書房 1996 p.34

また、世阿弥の「無心」の境地を「宇宙的生命ともいべき靈感のままに、無意識に演ずる」ものとする能勢朝次説以降、近代的な主客・心身二元論が解体するような、身体の実践を通じた心身一如の無の境地という日本文化特有の理念の事例として世阿弥の能楽論が持ち出されること、能勢の「型を通じた無心の境」に西田幾多郎の「絶対無」に至るための「身体的限定」という論が源泉にあったことが論述されている。(横山太郎「能勢朝次の世阿弥解釈における「型」と「無心」 西田幾多郎の影響をめぐって」『国文学・能 歴史と身体』学燈社 2005.7)

さらに、チベット密教の行における身体について書かれた中沢新一の「風の卵をめぐって」(市川浩、山口昌男編『別冊国文学、知の最前線・身体論とパフォーマンス』学燈社 1985)の解題に中沢論と野口体操との共通性が指摘されている。

#### 主要参考文献

- 野口三千三『原初生命体としての人間』岩波同時代ライブラリー 1996(初版 三笠書房 1972)
- 『野口体操 からだに貞く』春秋社 2002(初版 柏樹社 1977)
- 『野口体操 おもさに貞く』春秋社 2002(初版 柏樹社 1979)
- DVDブック『アーカイブス 野口体操 野口三千三+養老孟司』春秋社 2004
- 羽鳥 操『野口体操 感覚こそ力』柏樹社 1997
- 『野口体操 自然直伝』柏樹社 1999
- 『野口体操入門 からだからのメッセージ』岩波アクティブ新書 2003
- 『野口体操 ことばに貞く』春秋社 2004
- 三木 成夫『内蔵のはたらきと子どものころ』築地書館 1982
- 『胎児の世界』中公新書 1983
- 『生命形態学序説 根源形象とメタモルフォーゼ』うぶすな書院 1992
- 『海・呼吸・古代形象』うぶすな書院 1992
- 『ヒトのからだ 生物史的考察』うぶすな書院 1997
- アンドリュウ・ニューバーグ他/茂木健一郎 訳『脳はいかにして 神 を見るか』PHP 2003
- 池田 善昭『心身関係論 近世における変遷と現代における省察』晃洋書房 1998
- 市川 浩『身体論集成』岩波現代文庫 2001
- 大森 荘蔵 他『複雑性としての身体 脳・快楽・五感』河出書房新社 1997
- 折口 信夫「古代研究(国文学篇)・国文学の発生」『折口信夫全集 第一巻』中央公論社 1972(初版 1954)
- 鎌田 東二『身体の宇宙誌』講談社学術文庫 1994

観世 寿夫 『心より心に伝ふる花』白水ブックス 1991

小林康夫, 松浦寿輝 編 『身体 皮膚の修辞学』東京大学出版会 2000

中沢 新一 『聖霊の王』講談社 2003

湯浅 泰雄 他 『ユング心理学と現代の危機』河出書房新社 2001

ユージェニオ・パルバ, ニコラ・サヴァレーゼ 編著 / 中嶋 夏, 鈴木美穂 訳 『俳優の解剖学：演劇人類学事典』PARCO出版 1995

C.G. ユング / 松田誠思 訳 『錬金術と無意識の心理学』講談社+ 新書 2002

吉本 隆明 『心とは何か 心的現象論入門』弓立社 2001

『古事記(上)』次田真幸訳注 講談社学術文庫 1977

日本思想大系, 芸の思想・道の思想1 『世阿弥 禅竹』岩波書店 1995

本稿は京都精華大学創造研究所, 公募研究プロジェクト(長期一般研究)「土方巽・暗黒舞踏の受容と変容」(研究代表者・三上賀代, 2002年度~2004年度)の研究発表である。